

資料 折口信夫・木曾講義

文学と芸能との関係

小池元男ノート

伊藤 高 雄

(本学兼任講師)

共編

柏木 義 樹

(神奈川県立相模田名
高等学校教諭)

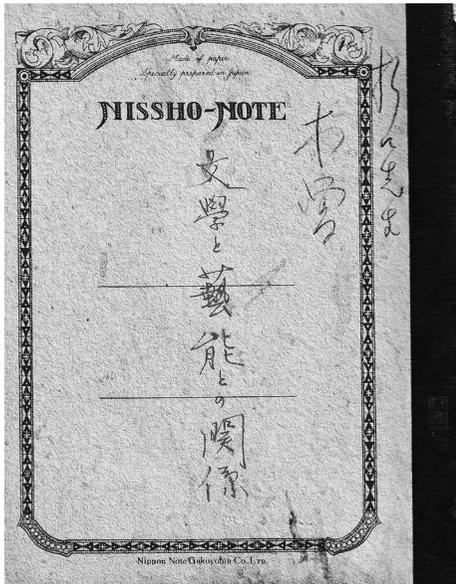
〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫(釈道空)が大正末年から行なった講義・講演を、学生で門弟であり、昭和六年から八年まで助手を務めた小池元男氏が筆記したノートの一部である。資料の解題は、先に國學院大學栃木短期大学国文学会の『野州国文学』第八十六号(平成二十五年三月)の「小池元男ノート―折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート―」、及び『國學院雑誌』第百十四卷第十号(平成二十五年十月号)の「折口信夫・國學院大學講義その他―小池元男・右上順ノート―」に報告しているの、そちらを参照していただきたい。

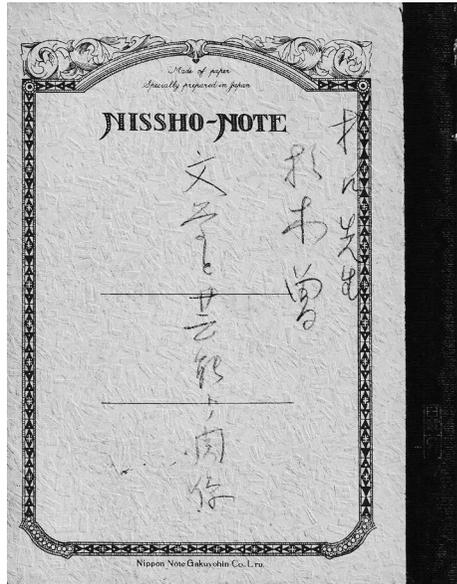
・本号に翻刻する資料は、ノート番号15・16の「文学と芸能との関

係」である。本ノートはNISSHOONOTEに、15がその前半、16がその後半で、奇数ページに鉛筆で記されている(偶数頁は未記入)。15の表紙には青の色鉛筆で「折口先生 於木曾 文學と芸能との関係」、同じく16には青の色鉛筆で「折口先生 木曾 赤のペン書きで「文學と芸能との関係」とある。講演の年月はわからないが、長野県木曾地方での講演を小池が記録したものである。表記は原則として常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いたところもある。判読できない箇所は□で示した。

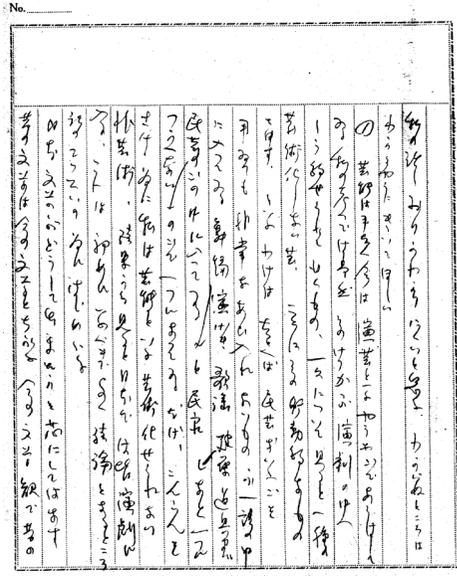
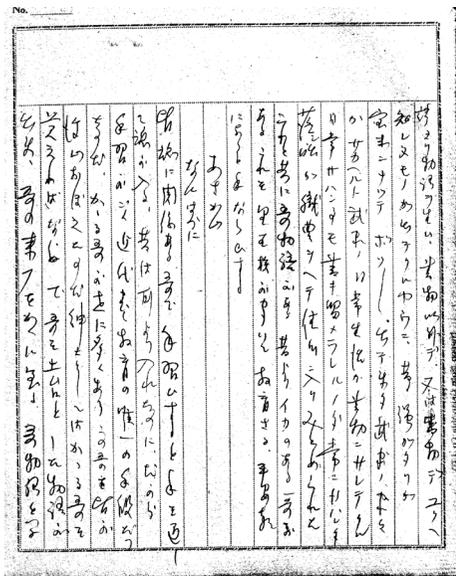
・本資料は伊藤が翻刻したものを、活字化にあたって柏木が読みなおし、伊藤が最終的に整理した。



上 小池ノート16
下 同上 1頁目



上 小池ノート15
下 同上 1頁目



文学と芸能との関係（小池元男ノート15・16）

私の話、おわかりなりにくいと思ふ。わからぬところはわかるやうに聞いてほしい。

I

芸術は平たく今は演芸といふやうな語で表はしてゐる。私の考へでは当然その結果が演劇の中へ集約せられて行くもの。一々について見ると一種の芸術化しない芸、ことにその行動的なものを申す。といふわけは例へば民芸等いふ語を用ゐても非常に相入れないものが一語の中に入つてゐる。舞踊演劇、歌謡、建築、道具まで民芸の語の中に入つてゐる。舞踊と民家、建築など一つに使へない。民芸の語で一つになつてゐるだけ。混乱を避ける為に私は芸能といふ。芸術化せられない非芸術、起原から見ると、日本では皆演劇に入る。これは、初めにいふべきでなく、結論とするところ。話の徹底の為に初め云ふ。

日本文学がどうして出来たかを芯にして話す。昔の文学は今の文学と違ふ。今の文学観で昔の文学を見るのは誤り。万葉も文学として扱つて一分一厘も違はぬものあり。しかし、我々の文学としての見方では、その人の動きはわからぬ。で、買ひかぶり見当違ひな鑑賞

で鑑賞してゐる。昔のものは昔の鑑賞で見ねばいけぬ。近代人だからとて、昔の人の心持で正して見ねばならぬ。作者と我々の心と離ればなれではないけない。古人の心は現代人にはわからぬといふ悲観説は本當でない。人の立場で違ふが、私は右のやうに考へる。

昔の文学成立の道筋は今の文学のそれと違つた考へを持つ要あり。いかにして文学が出来たか。昔の文学は所謂芸術とそんなに違つたものでない。文学は芸術だが文学以外の芸術と違はぬ。それほど確かな歩みはしてゐない。故に芸能といふ。昔の文学は文学でもあり、芸能でもある。それをくるめて話したい。

△は一から五までの前触れ。

饗宴。お振る舞ひ。ご馳走。日本の古語ではあるじと申す。これを中心に話を進めたい。あるじの語は主人と古くより用ゐてゐるが、あるじの語には主人と饗宴といふ意味と二意ある。普通の学者は、ご馳走をあるじといふのは主人が客をもてなす故だと思つてゐる。例へば野球の勝つた祝勝の宴はかへりあるじ。古くは神祇、相撲等の祝勝の宴をかへりあるじと用ゐるといふ。私は振る舞ひをするあるじ役を務める人故に、それをあるじといふのだ、饗宴のあるじが先で、それをする人を又主人の意にしてあるじとしたと思ふ。貫之の土佐日記——古今の編纂主任——の終りの方に土佐より戻り、海路の終りに淀川の岸の山崎へあがる時に、

十五日。今日車率て来たり。船のむつかしさに、船より人の家に移る。この人の家、喜べるやうにてあるじ、たり。このあるじの、またあるじのよきをみるに、うたて思ほゆ。

あるじがあるじしたといふ洒落。今も駄洒落をした。きうりがきうりを食つてゐたといふ秀吉に関する洒落咄があるが、その類。

その家あるじが振る舞ふ、その馳走ぶりのよかつたことを喜んで書いた。

日本の文芸すべて少なくとも饗宴に生れ、饗宴の時盛んになり、常に饗宴ごとに繰り返されてゐ、人の目耳にふれ、文学・芸能に固定したと思ふ。その話を少しする。

主人に対するのに客なしではいけぬ。客の事をまれ人といふ。ごく稀に来る人。常に来るのは邪魔者。まれ人を相手にしてあるじは行はる。稀人はいかなるものかをいひたい。賓客とは何か。我々の考へる昔の生活は宗教的生活、神、他の生活もあつたらうが、日常坐臥信仰によつて縛られてゐた。守られてゐる事もあつたが、縛られてゐた恐ろしい嫌な時があつた。今日の無信仰な今から考へられぬほど信仰に縛られてゐた。後世まで残つて行かねばならぬ生活は宗教生活のみ。単なる生活は後に残らぬ。宗教生活は人々の生活を規定して行くので時間的価値を持つて持続して行き、瞬間に消えはしない。その生活の中に周期的に来るまれ人あり。それが来ると饗宴をはつて取り持つ。その日が村の改まつた生活、村人の生き甲斐あ

る、一番公のはれの日。それが儀式又祭礼——儀礼の行はれる日。あまり日本の古文学・芸能を見ると種が多いので、話を一局部にまとめて話をわかりやすくする為に神楽で申す。

神楽は一に神遊びといふと信ぜられてゐる。

神楽はどこにも今日のやうにあるものではない。どこにはじまつたかはわからぬが、日本の神楽は岩戸神楽より始まつたといふ。天照神の天の窟戸に籠つたのは神が一時魂を遊離させて了つた状態で、この時はその魂をその人の体に持ち来たし復活させねばいかぬ。それが天の岩戸の話。神がお隠れになつたのではない。

その時、天鈿女命が舞踊をした。それを岩戸神楽と後世名付けてゐる。さて、日本のどこへ行つてもその地方くで考へてゐる神楽が違ふ。信州でも南北信で違ふ。戸隠神楽あり。伊那谷の一部より和田嶺にかけては神楽は獅子をかぶつて踊る。大神楽の一種になつてゐる。獅子を入れる車も、輿も神楽と云つてゐる。日本中で皆神楽は違つてゐる。地方の人々は一樣に天鈿女命の舞踊から出て来たこと考へてゐる。

神楽のはじめはそんな事でない。宮廷の例で見てもわかる。宮廷では、神楽が毎年行はれてゐて、内侍所の御神楽あり。

いつからか不明。神世からではない。平安朝のものだらうと思はれる。日本の神楽で伝統正しいもの。この他に宮廷には清暑堂の御神楽あり。宮廷の天子の住む場所（清涼・紫宸殿）、後宮のある皇居

の側に内閣があるわけ。宮廷に属した一番大きな政を執る所、これを八省院といふ。一番正式の政の行はれる所。この中に清暑堂あり。こゝの御神樂は、別のもの。清暑堂は炎上したにか、はらず、この後も御神樂は残つてゐた。今もある。内侍所の神樂と清暑堂の御神樂とは別。炎上後も行はれて、内侍所の神樂に対して清暑堂の御神樂と云つてゐた。又、新嘗祭の前夜、鎮魂祭が行はれる。この事は天子にい、魂をつけ申す祭り。魂を外へやらぬのでなく、外来魂を入れる。すると、その躬は健康に威力をもつて来る信仰。これは、宮廷以外の貴族万民に行はれ、たまふりと言つてゐる。毎年冬になると魂の切り替へをする。天子の魂が一年経つとくたびれるので毎年新魂を切り替へると思つてゐる。同じ魂だが、古びると困るので新しいものを迎へると考へて来る（後述）。毎年冬に行ふ。

昔のことは刈り上げ祭は秋、事実は冬行ふ。昔の人は秋と冬を近く考へてゐたのが、次第に離れて来た。われ／＼も秋を冬と一つに考へてゐる。

刈り上げは秋、刈り上げ祭りは冬。
花散らふ秋津の野辺
等、古い詞あり。秋になると花が散る。

み雪ふる阿騎の大野（大和の宇陀郡）
それも雪が事実ふるのではなく、刈り上げ祭りの頃は雪が降る。

雪散るや穂屋の薄の刈り残し

雪のころ、冬の祭りをしたので、皆冬の様子。

この花は柀の花。柀の枝を振り廻して踊つたのだが略す。

その鎮魂の時も神遊びあり。あそびは今は遊戯の意味だが、昔は音樂を奏する事だとされてゐるが、その前意は狩猟もあそび。

あそび狩 鳥の狩（事代主の）

すなとりもあそびと云つたのだ。すると、あそびは、鎮魂の為に魂をば呼んで、人の体につける為に舞踊をする。すると、その音に魂がさまされて寄つて来る。それをつけるべき人につける。天鈿女命がうけ（底を刳り抜いた馬船の如き）で踊り、その音で、魂が目ざめて天照大神の身に入る。あそびは鎮魂舞踊の意味が一番古い。それ故に鎮魂の為のものはすべてあそび。日本では魂をあづかる生命の指標あり。ie index を訳したのだ。訳してかへつてわからぬ。

魂を入れる目印。日本のみでなく他国の古代も野蛮人も、ie index を考へる。人間の魂でありながら、他の自然界のものにも宿る事ありと考へてゐる。魂が抜ける。——昔は魂を落としたもの多し。白痴のやうに青葉の頃ほんやりしてゐるのあり。

魂を落としたもの。さうした状態があると信ずるとさうした様が起こる。（頭注 例話である）

狐憑き等それ。事実であるが心理的事実で、実の狐が憑くのではないが、——その時は野山を狩り、魚狩りをする。それに魂あり。それを食べさせると、その人の魂が生き返る。潜在意識へ働きかけ

る為である。あそびは鎮魂舞踊。——その動作に鎮魂祭に神遊びが行はれ神楽も神遊びといふ。宮廷にはすると三通りの神楽があるのだ。もつとあつたらうが、時代により新しい名を唱へる。昔は大きな家に入らうくとするものあり。大きな家を祝福に来るものが必ず昔はあつた。これがまれ人のやうなもの。宮廷にも後々までさうしたものが来て、踊り、音楽舞踊を持ち来たした。

その中に一つ殊なものあり。北の御門、丑寅、外郭の丑寅の入口（門は三つづ、並んでゐるが）、偉鑿門といふ。

又開けずの御門といふ。御門とはごもん、建物をも示す事にもなり、その中は宮廷故にみかどといひ、更に天子までもいふ。民間でも大寺大社には不明門あり。

信州にもある。塀重門は開けずの門となつてゐる。（正しくは塀中門）。正客の来る時に限つて来る。（ヘイジモン等、信州ではいふ）武家時代以後から出て来る考へ。大家では飾りの門あり。小門から入つてゐる。

和田嶺の上和田では、門の多い所。重なる建物に必ず門を二つ持つ。大きな家には門が四つ五つあり。母屋にも隠居所にも正門と傍門と二つあり。三つ、四つある家もある。

この門はつけてもつけなくてもよいが、かういふ門のある家はい、客を迎へ得る良い家だ。一軒として誇る家は皆中門を持たねばならぬ。宮廷も、民間小家も同じ。宮廷の生活を下が模倣したのだ。宮

廷の生活を襲ふてゐる。宮廷の偉鑿門は開けない門。花山（院）天皇が道隆（藤原）の為に騙されて梅壺の女御（蟬丸の謡を禁じる等いふが宮廷とわれくとの親しみを持つもと。国民の持つ和やかな考へを潰す。蟬丸、延喜の帝の四皇子。その宮は狂女になつてゐる。そんな謡。穏やかに楽しんでゐる気持を荒らだ、せる為に役立つばかり。世が殺風景になるばかり）を愛され、その頃若い世間知らず故に道隆に騙されて、夜宮廷を忍んで出られる。大鏡、栄華物語など短いが身に沁むやうに書いてある。阿倍の道野に安倍晴明の門を通る物語あり。その時に抜けられた門が偉鑿門だといふ。しかしそれは後の話。どこの建物にも不開の門あり。正式な開門の時があり、まれ人の他は通れぬ道であつた。昔は（今は世がけちくしてゐるが）一年一度、又は数年に一度来訪する人の為にとつてあつた。時ならぬ時に開けたら、不吉が来ると信じたのを、逆に云つたのだ。偉鑿門に訪ねるまれ人の間にまれ人から出来た神楽あり。北の御門の神楽といふ。どこでも北に門のある所を利用した。宮廷の事は地方の社が一番宮廷の音楽舞踊を取り込む。平安朝になると宮廷に神が臨み、饗宴が与へられ恒例になつて神楽が許さる。これ京附近の臨時祭。大社の臨時祭は宮廷から神楽を許されたかつての時を記念する為である。今より見れば恒例祭だが出来た時は臨時祭。北の神楽は伊勢に残つてゐる。北の社の辺で行はれた。神の所へも寺へも。わけのわからぬ客が行く。京都の太秦の広隆寺の牛祭りの時に化け

が出て来る。土地の神、まだら神（摩陀羅神）が来て宮、寺を褒めた、へて帰る。さうした筋のわからぬ神だけでなく、もつと尊い神の来訪される時もある。大きい建物に神が来、後は行列を作り大勢で練り込んで来る。その道中が旅行のやうに感じる。

昔は遠い神の国より神が来、宮廷を褒めて帰ると思つた。それを都の中でその旅行をかたどつて、休み場所が出来る。中仙道の駅々で休む。それに見立て、京の町の中で休み、最後は宮廷に入り、宮廷を褒めて退散する。平安時代には正式に行はれ、鎌倉時代には人が出て来る。特殊な部落から人がやつて来て宮廷、貴族を褒めて帰る。古くはそれを神だと人々が信じてゐる。諏訪等でも神が行列せられ、これに逢ふといけぬとか、神の通る道が定つてゐる等云ふが、それほど神は正確に出て来ぬ。世の人が全て神を見る事が出来ぬ故に神に仮装して歩くのを、それを神と信じたのだ。村の昔の信仰をなくさぬ為、もつと昔は自分がやつてゐる事を神の行と考へてゐた。京の町を練る人々があちこちで休む。正月十五日前後に宮廷で踏歌の節会が行はれる。その時は外より練り込んで来て、宮廷で踊る。化物の風をして大きな冠で兒はのつべら棒で宮廷の女を卑猥な事を云つて逐ひまはす。その休む所を水駅と飯駅、藪駅等を作つてゐる。宮廷の貴族の家等へ招かれて休むのだが海道の宿場に見立てるのだ。旅行者は必ず馬に乗る。ことに古くより神は馬に乗つて来られる。だから藪を食べさせる。宮廷に勤めてゐる男女出て踊る。後、

男十五日前、女十五日以後に分けて踊る日をとる。
とにかく、わからぬものが、馬に等乗つて来る。日本の古歌に馬の歌が非常に多い。

いづくにか駒はとゞめむ あさひこのさすや岡辺の玉笹の上に
意味の不分明な歌。又、
神楽歌

笹の隈檜隈川に駒とめてしばし水かへかけをだに見む
神の帰るのを名残を惜しんで歌つたもの。後代の感じでは恋歌になつてゐる。

乗馬の歌が多いが、恋歌と皆感じてゐるがさうではない。祭りに来る神をひきとめるつもりの神歌である。後代人はさういふところは単純だ。昔の人は、そこは神を恐れて、又いらつしやい〜といつて神を送つてゐる。疱瘡神、田の虫、皆名残を惜しんで送つてゐる。神は帰つて戻つてしまふ。十返舎一九（膝栗毛）は黄表紙の『貧福蜻蛉返』の中にあまのじやくの話あり。一九の發明でなく、古代よりある神がやつて来るとその方法で送つたのだ。でないと氣に入らぬ。踊り狂つて悪病神も村境まで送るのだ。かくして、賓客が来る時の儀礼が定まる。
人間の客が来ても、神をもてなすのと同じ事。日本の古風な神楽は祭りより一步も出てゐない。おしいをするのだ。田舎ほどおしいをする。あれは神をもてなす法。山伏などのは一番酷い。強飯等云ひ

無茶苦茶に喰べさせてゐる。それが一つの式である。饗宴を通りこすが、客は喜ぶのである。いよ／＼烈しくなつてゆくわけ。

かくして日本文学の上にも芸能の上にもまれ人が人の家に行きあるじを受けた話が多い。万葉集にも歌。

あらかじめ君来まさむと知らませば門に屋戸にも珠敷かまし
を

等いふのも、後の研究者から誤解されてゐる。神祭りの夜の歌。更に後には恋人が来た時もさうした歌を作るのだ。

II

私共が考へてゐる冬の祭りとは、今ではあとを殆んどひそめたが重大な信仰上の位置を占めてゐた。

ふゆとは春夏秋冬等と共にむつかしく日本語で古い語。木草の芽が出るからはるだと言ふたり、あつがなつになつたといふ説は考へねばならぬ。落し咄のやうだ。はるの方はまだいいが、さうだと言ひきれぬ。木草の芽がはるからはるだとは不安定。はる、なつ等はたとへそれが木草の芽がはるからだとしても、も少し語がつかねば語にならぬ。私はまつりがついてはるまつりの行ふ時故にははるまつりが慣用でまつりが落ちてはるまつりの行ふ時故にははるまつりが略語の手順を有力に考へる要あり。ふゆはふゆまつり。今も殖ゆといふ。が、分割する、又はせられる事。分割する事に昔の人は減

少を考へず増殖する事を考へてゐる。分割すると同性質のものが二つ同じものとして出来ると考へてゐる。ふゆとは増える事。分割も増える事。それが増殖といふ事を考へてふゆるとなる。この時に魂を分割して魂を人に分ける。尊者は皆それ以下のものに魂をわけてやる。魂の分割を信じてゐた。今も賜ふと云ふ。頂戴はたまはるといふ。魂が根のもと。たまふである。これは本当。みたまのふゆ(御魂の殖ゆ)等といふ。恩賚といふ漢字で覚えてゐる。意味は違ふが似てゐるから。みたまのふゆとは天子の魂の分割したもの。Soulで示されるものを分けて、宮廷に仕へるものに下さると信じてゐた。常に着てゐる着物につけて下さる慣習となると着物をくれる。冬着物を貴族より下々まで目上が目下に与へるやうになつた。もとは魂をつけてやつた。

その逆に下のものが目下が目上に守護の魂を献上する。これは服従を誓ふ事。又受けた人はその魂の力でその人々を治める力が出る。Aの魂を天子にあげると、Aの威力は皆宮廷に献られる事となる。前者と、この後者とは昔は混同しなかつた。前者は天子のくたびれた魂をいたゞいたのだ。みたまのふゆでも天子を護る魂故にわれ／＼に力を与えると考へた。魂の受授交換は冬行はれた。みたまのふゆは天子の古魂を分けて与へられる事。自分等の幸が増し健康になり威力を増す。それを生なまぬ温くぬ訳すと恩賚となる。ふゆはみたまのふゆまつり。それがふゆのみで魂を分ける祭りの意

となる。その時期もふゆであらはれてくる。他の意味でない。

はるも定説とや、違ひ、尊い方は分割後新魂のつく為に絶対に謹慎してゐなされる。裳を天子がかづいてゐる。そして魂が身についたしるしがあると、もをどけて出て来られる。そしてはるまつりが行はる。もとはるは物を払ひのける、脱ぎ捨てる事。謹慎の生活より自由な生活に入られる。高い所より初春のみことのりを群臣に下さる。これがはつはる(初春)の祭り。はるは物を払ひのける。はるは裸形になるといふ事である。民間で云ふとはれといふ事は時代を経て綺麗になつた。けにもはれにも等云ふ。が、祭りの時は昔は、平然と全てを暴露した生活をした。はれはさういふ意味。沖繩でははれの遊びは祭りの時に女が裸形で踊つてゐる。鈿女命の踊りの時と殆んど同じである。古典は遠慮して書いてあるのだ。これから考へると、はるは何でも振り捨て、そこへあらはれ、力強い生活が行はれる。ふゆごもりはる等の枕詞も解つて来るのだ。宮廷の天子の生活である。

なつ、あきは略さしてもらふ。

魂を分ける事と身につける事とは別。新魂をつける為に古い魂を分割して下に与へられ、御自身御身に魂をつける。つける事をふる云ふ。後は外へ出さぬ事のみ考へて鎮魂と書いてたましづめといふ。魂の遊離を防いでゐるのだ。

たまふりとたましづめと、同じ鎮魂の字だが意味が違ふ。民間では

ふゆのこの祭りの時に変な客が来る。蓑笠をつけ、姿を隠してゐる。

日本の古では蓑笠をつける事は鬼の姿。枕草子に蓑虫の話あり。これに少し連想すればあはれな話になる。昔のをには巨人で、蓑を着て来るもの鬼よ等、今も子供は云ふが鬼の姿。須佐之男命は天から下る時に贖ひがたい罪を犯されて下られた。天上の罪の贖ひ方がないので財を全て皆とつて了ひ爪、髪、髯、つばきまでとつて素裸にして放り出した。そこで青草をとつて身につけて地上に下りたのが出雲の肥の川上だつた。そこで贖罪をする。これ蓑笠をつけた形。贖罪の為に田を守つたので田を守る神と考へられた。その形は、この風を尋ねる人の形は村々で違つたが、普通人の形と違ひグロテスクなもの。その点が変わると面白い可笑しいものとなる。爺婆も出て来る。われ／＼の生活を守るのはわれ／＼の祖先の魂で、一年一度出て来てわれ／＼の生活を保証してくれる。自分等の生活は野山の spirit の地を奪つたので、野山の spirit は人間生活の邪魔をする。これを抑へるのは、他土から自分等に好意をもつたものが来てやつてくれると考へ、お化とも祖先とも考へる故に、爺婆の姿で神の如きものが来る。多くは爺のみになる。饗宴の時に翁がよく来る。平安朝の文学には常に翁が作歌してゐる。源融。河原院を建てた。(皇族のまゝでは世に働きかけられない。神事に関係してゐた。そこで皇族の力は微々としてゐた。世がつまり奈良朝になると臣籍に下らる。平安朝になると天子も皇子を臣籍に下らせる。この源融

が豪華な生活をして六条の河原院をつくり、難波の海の水を毎日汲んで汐焼きをした、といふ、後の俄分限者の手本）その話、伊勢物語にあり。かたゐおきな（業平が書いた形故に業平自身の遜辞の如く書いて）、

塩釜にいつか来にけむ朝風に釣りする舟はこゝに寄らなむ（命令）寄つて来たらいゝだらう

かゝる歌多し。饗宴は必しも座敷中の事ではなく野で行はれてもよい。寄りあひには皆饗宴の形を持つ。芹川の行幸の時にも、（小鳥狩の名所）翁が作歌してゐる。

翁さび人などがめそ狩衣今日ばかりとぞ鶴も鳴くなる

おやじでゐ乍らかうしてゐる事を他人も目をつけてくれるな。狩衣——昔は神聖な行事。着物も謹慎の神事の標がついてゐる。小忌衣といふ。今も能の舞人になどついてゐる。狩の時は鶴ツルの印がついてゐたのだ。鶴のついてゐる、その鶴さへも今日限りだといつて鳴いてゐる。それではないが私もこの光榮にあまる饗宴にはべる事も、今日限りだと思つて泣いてゐる。

あなたの光榮ある生活に比すると自分等の生活は駄目なものですといふのは饗宴のほめ言葉。自分の悲しみが主ではない。

今の感じ方では駄目なのだ。根本から間違ひ。翁の饗宴を賛美するほめ言葉。

同じ伊勢物語にも春日の社が京に遷都の後、分祀せられて大原野に

祀らる。二条后といふ方——清和天皇の女御、——入内以前より業平と交渉あり。又後に失敗してゐる。清和の後、陽成帝即位して二条后になる。天子の後でなくとも子が天子になれば皇太后。この方に業平がついていつて老人が昔を思ひ出して

大原や小塩の松（山）も今日こそは神代のことを思ひ出づらめこの歌も、大野よ。その小塩山の松も今日はその松が生へ、山の出来た神代の事を思ひ出してゐるだらうといふ事。賛美しすぎてゐる。それはいけないのだ。壬生忠峯は忠躬のほめ方を叱つた話あり。今は敬語は実に乱れてゐる。

かしこまゐりました。

田舎の素朴な言葉の方がいゝ。信州は少なきにすぎることが。松が年寄つたといふので松といつたのだからうが歌としては山の方がよい。賛美をしすぎてゐる。しかしこの歌は業平のいやみだといはれてゐる。自分等の交渉のあつた時代の事を思ひ出してゐるでせう。

この歌等も、ひよつとすると業平の歌でないかもしれぬ。翁がやはり行啓のお供に行き、その席で歌つてゐる。

われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の老松いくよへにけむ

等あるので小塩の松となつた。翁が出て饗宴の興をそへる。この事は万葉集にもある。十六の鹿、蟹の歌が全ての身についたものを差し上げると云つて、上の人を賛美した歌あり。鹿、蟹のには年寄つたと云つてゐる。飛鳥の宮廷の事が出る。

辿ると翁の歌多し。万葉集の同時代の人尾張連浜主の歌。

翁とてわびやは居らむ草も木も栄ゆる御代にあひて舞ひてむ
自分は翁だといつて嘆いてるやうか。

この天子の御世は栄へてゐる。

宴に翁の出るわけあり。古今を見ると（二十と雑の歌が面白いが）
年寄の歌多し。

いにしへの野中の清水ぬるけれども心の心を知る人ぞ汲む

古から名高い野中の清水が今はなまぬるくなつてゐる。けれども以
前のわけを知つてゐる人がそれを汲んで飲む。昔の事を知つてゐる
人は俺の事はよくわかる。

今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを

今はかく駄目になつてゐるけれども、俺も昔は一人前の立派な男山。
そして栄え繁盛した時代もあつたもの。

世の中にふりぬるものは津の国の長柄ながらの橋と我となりけり

これ皆もと宴会の歌で、あはれな事を云つてほめたのが、後いばる
事になる。饗宴、翁の出るのは単に出るのでなく、稀れ人の一つの
形。すると宴の長老が出て舞ふのだ。こゝに錯誤あり。まれ人と座
末に語つてゐるものと混乱してゐる。神とspiritの關係が乱れてわ
からなくなる。のち神は来ずspiritが祝福に来ると考へるに至る。

神来り、spiritのわざわひを抑へたのに、後にはspirit来り、私は
あなたを守ります。かく、服従の言葉を申しますと、春の初めの式

がかはる。平野の生活と山の生活の違いになる。もと海の生活が山
の生活に変わり、来た。山と村との關係は密接。村の生活と山の生活
あり。もと海の彼方の常世の国より来た。神か化物かわからぬまれ
人が来てspiritを抑へてくれた。今度は山地に入ると山から土地の
spiritが来て服従を誓ふ。祝福の言葉を述べる事になる。山人だと
考へるやうになる。

（頭注 山人の説明略。柳田先生山人考あり）

山から年末に山人が里を祝しに来、山の土産を持参し、里のものを
持たしてやる。物々交換をする。沈黙交易の古形等云はれるところ。
宮廷も里でも霜月に鎮魂祭をし、山人が来てやつた。その時、
山人は祭りの為に神聖な木の実、草、櫃かひ、搗栗かぢり、松、等となつた正
月の飾り物となる。これを得ると祝福のしるしとなる。里の土産を
やると、いくらでも持つて行くので、山人の強慾話になる。（信州
でも山姥の話あり。田植タウシ時の。）かくして霜月より師走に里の神
楽。——里の鎮魂の為に行はる。山人の為事として。山人の姿は地
方々でまちまちだったが、老人の形のグロテスクなものであつ
た。代表的なものが出て来ると皆それに似て来るが、従はぬ村も残
る事にもなるのだ。似てゐながら違つた姿が残るのだ。これがいつ
でも年の暮れに限らず里の祭には翁が参上する事になる。年暮れ、
刈り上げの祭りに次いで大切な田植タウシ時に爺が出て、地方で今だに
田タウシ主タアルジ等いふ。田長フサとも云ふ。田の持主でなく田のspiritである。

地方によると変形。神樂に太郎次等云ふ。男女交合の真似をする。田の稲がチャームされて稔るやうになるマジックである。昔より田植多の時に出来たのだ。栄華物語に出て来る。上東門院と云ふ中宮——皇后なら一人——中宮なら二人以上あり得た——の時に田主の翁が出るといふが、古書を読むと居、今だに田植を正しくやつてゐる所では出て来る。農村生活の一つの意味がこゝにある。昔の形をどこかに変形しながらも残さずにはゐられない。田植に五月乙女に対して田を囃しに来る人々あり。宗教的に古い約束を守る備後、島根の山間部では（伯耆の大山——田に関係ある山。その信仰で抑へられ昔に近い形で田植をしてゐる——）田を囃しに来る。つまり大鼓を腹に吊り華やかな風をして昔はびんざ、ら、笛を用ゐて来て、田の中で踊り狂ふ。乙女も兒を隠してゐる。今でも化粧をして出て来る。乙女の誇るべき日の事ではなく仮装する日。乙女が仮装する事。昔は変装の意味で白粉をつけた。後代の理會では重大な日だからめかずと云ふ。来る男はやはり兒を隠し身を変へて来る。日本の信仰を突き詰めて行くと須佐之男命とその部下といふ事になる。そしてわけのわからぬ神として出て来て、はやして田に鎮魂をする。稻魂を田に落ち着かせるつもり故にたあそび（田遊）と云ふ。この田遊が芸術化して来る。觶（東海の山間にはまだ残つてゐる。松で作つたもの。盆にも用ゐたらしい。貧弱になつてゐるが、もと大）、鼓も興を持たれたが、これを田楽といふ。それと笛。非常に田舎め

いた賑やかなもの故に上流の人々が誘惑されて田から家の中へ持ち込んだ。平安時代末より鎌倉時代へかけて盛んに行はれ、呪師ノロシ・ジレンがその芸を取り込んだ。又は呪師の芸がそこへ合体して出来たのが田楽といふ一の芸能。鎌倉時代中流行してゐた。あまり流行して禁ぜきれないでゐた。後に觶は竹製になる。

北条高時の幕府を亡ぼしたのは田楽の為だといふ。次第に続いて田楽が行はれる中にその諸要因の中、（万才、越前と三河と二流あり。屋敷ほめをする）万才師の他に、（万才は何でも取り入れる）田楽もその如く鎌倉前の生きてゐる芸能は皆取り入れた。上流低級皆取り入れた。手品、毬つかひ、羽子板つかひ、軽業、びんざ、ら。純然たる物真似芝居＝田楽能、も出て来る。

能とは物真似。田楽能は物真似芝居。今断片化して残つてゐるだけではわからぬ。後の能楽と種目で見ると似た点多し。後の能楽は田楽から出たらしい点もある。田楽の中より田楽役者の一部が独立して猿楽となる。申楽と書いてゐる。実は独立して申楽といふ名が出来たのではなく、申楽の名はもつと昔からあつたのだ。

田楽の名は鼓の名から出た。田楽を中心としてゐるので田楽といつたのやら、鼓の名が（神楽をかぐらと訓む理由なし。もと、神遊びといひ、他に神楽の名出き、神楽に当てはまつた。）と同じに田楽タテマツヒを後田楽デンガクといつたのだ。日本芸能の上では訓音に読トクす。田楽の鼓と田楽の関係は二通りにとれる。

同様に能はもと態となつてゐる。芸人が略字したので能となつた。やはりタイと云ふべきを略字の音にノウとなつた。態は物真似といふこと。宮廷に才男の態と用ゐてゐる。才男といふ人形地方にあり、人形の芸。宮廷の神樂では人間が人形の物真似したので、才男の態と宮廷で云ふ。態の略字が能となり態を忘れて、能と読むのは自然。能はもとく物真似。芸はをどりの事。芸は舞踊、能は物真似。熟して芸能と云ひ、又能芸と別に同内容を云ふ。この時は能が主となつてゐる。物真似芸の事。田樂が盛んになつた後、田樂がいろいろ取り入れ、後、崩れていろいろな芸となる。その中有力なのが申樂。田樂の有力なのを申樂がとる。室町より申樂が榮へ田樂が衰へ、織田、豊臣には田樂は衰へて申樂の敵でなくなつたが社寺に古典的なものとして残つた（社寺にはその保存力あり）。専門家がなくなると田樂は形式化して了つて、まちくになつてゐる。申樂といふ事は前述の如く実は田樂の中に起こつた名でなく平安の盛時に用ゐられた名であつた。さるがく↓さるがうとなる（申樂は日記類に用ゐられてゐる）。滑稽な事をする動詞がさるがう。それが芸能化した時、さるがく（申樂）といふ。さるがうところの芸がさるがく（申樂）となる。日本芸能史上のかくは音楽でなく舞物真似全てこもる。正しい音楽舞踊の時がくとはいはぬ。がくといふと少し乱れたもの。田樂はその意味を持つ。申樂、勿論、さるがうところのがくがさるがくとなる。おどけた芸能といふ事。平安

の盛時に申樂の語が出て来る。新猿樂記を見ると色んなものを含む、滑稽な演芸といふ事にすぎぬ。申樂とはどれも取り留めたものでなく滑稽な芸能。ところが田樂の一部に一つさるがくの語に当てはまるものあり。所謂さるがくの語に当てはまるもの、即ち田樂の最初の翁の芸。田樂は田遊び出より翁はつきもの。翁が滑稽な事をして人を喜ばしたのだ。淫猥な事をして、それが申樂。しての役者は（して、わき、専門家に分れてゐる。宝生はわき役）、田樂のさるがくはこれこれの村人がやると定つてゐた。それを座といふ。田樂、申樂をする座（社の祭りの役割の者の控へ場所。後、寺の方でも云ふ。同じ組合のものの控へ場所が座。その座がどこと定つてゐる故に村が基準となる。村名を呼ぶはず。専門化して来ると昔来のものを本座、新座等いふ。田樂が専門化した為。座は芸の組合、ある特殊なもの。特殊部落といふのも血筋でなく職がいけなかつた。寺社豪族の奴隸であつた。祝福の爲についた奴隸であつた。後になるとパトロンを拵げて有力な人につく。芸人くさくなつて卑しまれるのだ。芸人の村は特殊部落である。河原乞食といふのも、山窩と同一視されたのだ。芸人村は社会から待遇を低められた。ある部落はよくなり、固定した村は卑しまる。特殊部落は芸人。皮細工、染物屋等それ。染物屋は固まらぬのでよかつた。芸人村や皮細工は団体としてゐたので特殊な待遇を受けたのである。血の事でなく職業より）座は社寺の控へ場所より出る。ある村の人々で組織されてゐるのだ。結構

村から出たのが結崎座（奈良の西。觀世の家の元の人々がこゝを基礎としてゐる。）かく座は幾つもある。

これが田楽をする時、その中にゐてまづ翁の芸——田楽に属する申楽は翁であつた。翁は時代が経つと神聖なものになる。神か化物かが高尙になる。面白い部分も欲しいので分裂した。黒式尉と白式尉に分れる。翁は一体芸にいくらでも出るので分裂しやすいのだ。白黒の間に中間のものも出る。しろきの翁、くろきの翁と呼ばれる。黒式尉と白式尉の他に一つあり。これを世阿弥が十六部集の中には翁の変つた名が出る。が結極、翁、千歳、三番叟に定つた。上品と低劣の中間にあるものが出た。ところが日本古来の雅楽以来の舞踊の規則では面をつけてする芸と面をとつてする芸とあり。同じ手であり乍ら、多く童舞である。恐い面をとつてする。すると花やかな美しい子供の舞をする。千歳はもと翁だが、面をつけず若く美しいものが舞ふ。流派により面箱といふものあり。これを出さず千歳が面箱を持つのが普通。昔の芸故に整然としない。それが猥雑な点を捨て上品になつて来るのだ。面箱など出ると邪魔だったので役者が持つて出るやうになる。三人の翁の一人が童舞の形になり美しくなるのだ。これが申楽の本芸。申楽の座の者が田楽の本芸を奪ふ。田舎廻りをする。遠駿の地方まで世阿弥は廻る。それで本芸外の事もやり、慣れてくると田楽の本芸まで侵す。世阿弥の芸には田楽、申楽の別はあり乍ら、芸の区別はなくなる。同じ芸をやつてゐた。それで独

立す。申楽は有力な保護者を得て来た。申楽の方では現在物を次第に入れて来た。曾我、義経等世話物を行つた。室町の時代の武家の生活を映したものを行つた。舞台へ出れば前代の曾我・義経も武家時代故に面が入らぬ。故に素兒で出て来るのである。今の能では実感は起きぬが芝居の世話物をするときと実感を起すやうに当時も実感にこれに起したので。美男子が出て来ると皆その兒を眺める。その方が栄へたが田楽は古典的で面を用ゐたので衰へた。申楽は田楽の含まぬものを含んで来た。その主なものは幸若舞。主として若い美男が舞ふ。昔の舞はふらくと散歩してゐるだけである。それだけでは仕方ないので歌を唄ふやうになり芸になる。緩慢な芸であらう。今の幸若は退化しきつて了つてゐる。盛時が過ぎると芸は変形すれば又栄えるが、でないの後退する。今の幸若はそれ。

その幸若の元の良い所を申楽が取り入れた。結崎座に限らず他の座もさうであつたらう。世阿弥は非常な美男子で義政をとらへたので諸大名が皆力を入れたので勢力を得。地方へ行くと更に盛んになる。觀世以外でも美男子を盛り立てる。かくなつたのは幸若の賜物。大田田楽は複雑で統一しないのを、申楽は簡單化した。もとく翁だけだつたのを、手をあげ、田楽の面白いところと大流行の幸若を取り入れたのだ。そこで台本——舞ことはよりは能の現在物の方が調も優れ仕組も面白くなり、田楽、幸若に勝つた。

翁がそれでもと白尉は神になつて了つてゐる。すると黒尉も神聖

になる。これを分つて翁と三番叟とする。翁は神聖となつてゐる。毎日翁、千歳、三番叟出づつ。

明治以後、翁を厳肅すぎるのでしなくなる。正月の舞台開きの時以外にせなくなる。昔は毎日やつた。五日やれば五日間、舞方、詞が違つたのであるからいろんな翁があつたであらう。十二月往来などいふ翁等云ふもの。法会舞——申楽が奈良の寺々についてゐた舞だ。春日、又興福寺で舞ふ時に行ふのが法会舞。鈴の代りに錫杖でもつて舞つた。

もと即興であつたらうが次第に詞を変へて来た。不明な詞になつたり卑しくなると詞を変へて来る。これはさうむつかしい事ではない。世阿弥、観阿弥の書いた、能の詞を作つた。僧が作つた等云ふが、さうではなく、能役者が作つたのだ。常にことばを用ゐてゐる故に詞を使ふ事が上手になるのだ。古典になると綺麗なことばになる。翁のことばも変つたらう。しかし姿は変つても内容的に見て猥雑なものが混じてゐる。エロチックなものあり。「アゲマキ」等いふのはこれである。青年期の近い男児の美少年を思ひ乍ら、

あげまきやとんどや ひろばかりくさかりねたればかや……

平安初の流行歌で実感も起こらぬがこの歌が取り込んである。今だに田舎に行はれてゐる田遊びで行ふ所と全く同じである。信、三、遠に皆ある。それが上品になつたのだ。さうして身振りもやらなくなつたのだ。今度は祝福を主にして来るやうになる。翁のやつた事

を面白く砕いてやるのが三番叟の芸。

III

日本文学の最小形、といふと歌と諺である。不思議かもしれぬが歌が文学の種であり、文学なら諺も文学の種である。時さへ恵まれ、ば文学となつたのだ。諺の内に文学の種の素質の少ない事もあつたらうが。

まれ人が何で spirit を圧したかといふと伝来の詞がある。村人がまれ人となり古来の伝来した詞を唱へると spirit が答へる詞あり。長く唱へ伝へられて無くならなかつた。文学の出来る第一歩は言語を文字の時代まで持ちこたへねばならぬ。支那文学が入り日本へ沁み込むまで日本文学が持ちこたへねばならぬ。それは神と spirit の間の詞であつた。神は命じ、spirit は服従の詞を本位としてゐた。神は命じるだけでなく征服のことを云ふと、spirit は従つた歴史を云ひ、哀れみを乞ひ、守り魂を捧げる事を云ふ。かくして歴史を語る事となる。その中に心持を訴へるところより抒情詞が出来る。命令の気分の神の詞が一傾向を生んでくる。神、spirit の詞の中、短句が遊離し、短いもののみ唱へる事によつて長詞の代りとなる。spirit の詞の中で一番大切な部、神の詞の圧服的な詞句が固定し、諺、spirit の方からは抒情的な詞句が出て来る。かくうた・ことわざが世に並び行はる。これを云へば長詞を唱ふのと同じ事になるのであ

つた。そして社会の人を規定する力をもつて来た。後、短きに失して意味が解らなくなる。いろはで月夜に釜を抜く等云ふのもわからぬやう、ことわざの中には慣用句あり。髪をくすべるといけぬといふ。合理解をする人もあるが。

刃物とへつゝい、敷居の上、二人火吹き、夜の口笛、その他にわからぬ詞多し。記紀はじめ風土記等を見ると、わからぬ慣用句が多い。枕詞等みなことわざ。理由不明に地名に冠して枕詞を云ふ。常陸の地名にも、

筑波の山に黒雲かゝり衣手（序歌）ひづちの国

この序歌がことわざだと云ふ。枕詞の古いのは皆ことわざと云ふ。何故云ひ出したかわからぬが、無理に理由をつけてくる。（頭注

第一日）

日本国家成立前の話になる。

日本民族がこの土地に落ち着いたのは諸論あれど、三千年よりもつとく古いこと。歴史家の異論をはさむより古い。

その日本民族の歴史と共にどこまでさかのぼるかわからぬ。口頭詞章——律文出来のもの——の歴史は長い。その一部分が単純化して唱へ事になる。その短いものをうた、ことわざといふ。その長いものが、祝詞、宣命となつて伝つてゐる。その昨日述べた短いもの、ことわざ歌だが、昔より不明な意味をことばが伝へてゐる。もと意

味あつたものが、意味が失はれて了つたのであるが、けれども、そのことばにそむき失ふことが出来ないと思つて保存してゐる。ことばまはことばが靈妙不可思議な威力を発揮する事。日本が神の恩寵によつて文章の栄へる国の意味でない。たまは spirit といふこと。言葉の中に spirit が含む。それがことばだ。たましいとはたまの働き。後、玉が出来てたましひがたまを示す。言葉にたましひがある。口頭詞章にたましひがあるといふ事で、単語に魂があるのでない。詞章を唱へるとその表現通りの結果が実現する。縁起の悪い事をいふとその通り実現すると思つて嫌ふ。詞通りの実現は詞の spirit の働き。その不思議な作用をことばまさきはふといふ。で、どんな短い詞でも大切にしたい。意味を忘れ乍らともかく伝へた。諺に対して皆が合理的性能をたくましくしてゐる。分解解剖をしてゐる。歌は意味がわかるが、諺はわからぬので古人も諺の方へ力を入れてゐる。記、垂仁の時、沙本毘売、沙本毘古の話。稲城で兄妹共に死ぬ話あり。兄可愛いと云うたのが誓ひの形としてゐるのだ。本牟智和氣を狭保姫は生む。天子が玉造りを恨み罰せられた。それより「所得ぬ玉造り」といふ諺が出来たといふ。これは記の編纂される以前に伝承された時から詞が行はれてゐたのだ。記編纂の材料たる語部の物語の中には、「所得ぬ玉造り」の諺と共にある時代にはかうした諺が行はれてゐた。それを解釈してゐるのだ。職人故に土地を持たぬのだ。

昔より近代まで日本では土地を持たぬ。土地を生業の根柢としてゐない。その点農家と違ふ。玉造りも大切な職人で土地がない。これを垂仁に罰せられたからだと記に含まれた物語では説いてゐる。これは他の意味である。それをある時代に合理的に説いた。このことば恐らく所得ぬは不適當。玉造りではないが所を得ぬ。——不適當だといふ事であつたのだ。その洒落であつたのだ。その諺を遡つて、記の如く説明したのだ。又一例、仁徳の即位前の位譲り。淡路の野島の海人（毎日海幸を奉つてゐた人々）が応神の死後この御兄弟の間を行つたり来たりして……

海人なれや 己がものからねに泣く

と日本紀に書いてある。これは即ち、日本紀編纂当時から、又は以前に行はれてゐた、その説明をそこへ持つて行つた。史上の事実と訳わからぬ事柄と連想によつて物語の幹の中へ織り込んで了ふのだ。仁徳の位譲りの時に海人の困つた話へ割りこましたのである。昔の伝承から遊離して来たからで、皆諺は昔の伝承から遊離したもの故に、逆に世にあつて意味のわからぬもの、又意味はわかるが出自不明のものは、諺の入るべきところを求めめるのだ。その合に合理化、こじつけが行はれるのである。この諺は自分が海人であるからか、自分の持つてゐる藻のでありながらどうもならないで泣いてゐるといふ事。人間の欲望など皆こんなもの。掛けて言つてゐるのだ。海人であるからか、自分自身のものから……で稚郎子わきいらつこと関係ないこと、それ

を昔物語へ入つたのだ。古伝承の物語に入つてゐる諺と、後に入れて行つたものとあるのだ。

語部の周縁階級の歴史を語つてゐた。（かたるとは叙事詩を語る事。義太夫、浪花節等。うたふは抒情的なものを節づけて歌ふ事。）その語部は何故出来た。唱へ事を唱へつづけた人々の中、唱へ事の中の歴史的部分を受け持つものが語部。昔から語部は伝へてゐる歴史らしいものを伝へ、字の時代に入つて記録せられて来た。

大昔より有史時代までの知識の保持者は、語部。そこへ芸能的部分が出来、滑稽なものが多くなり発達し、人の笑ひたいところを刺戟する方面が出来てくる。持統帝が志斐姫に馬鹿咄をいつもした。

否と言へど強ふる志斐の強語このころ聞かすて朕恋ひにけり
志斐姫の強語と知つてゐるがこの頃聞かないので、又恋しくなつて来た。その答へ。

否と言へど語れ／＼と詔らせこそ志斐いは奉せ強語と詔る

詔らせこそ詔らせばこそそのば音略。強ひごと。こじつけた、嘘話。これは志斐姫は恐らく中臣の志斐連の家より出た語部であつたらう。物語を聞かせるとことだまが身につく。昔は上位の人を教育する等といふことはない。天子は神の叡智を持つて生れる故に、教育できぬと信仰的に考へてゐる。それで自然に物語を聞かせるとそのことだまが身につく。教育と同じ効果を生ずる。昔の教育は世の先例を教へればよい。後には言葉を教へた。習慣が断片化し皇族・貴

族に単語を教へるだけ。寺小屋では、単語のみ教へて僅かに往来文へ進んだのみ。平安朝では単語のみ。その前は物語を聞かせ教育してゐたのだ。教育意識無しに。その物語の中に馬鹿馬鹿しいものがある。諺の説明など、後代に昔にならつて臨時に物語の中へ取り込んで語る。それ故に自然に強語となる。そこへ反抗心が生れ、笑ひが出来る。皮肉な所を考へて笑ひが生れる。竹取の話等でもこれ。皆諺の説明になつてゐる。

竹取は奈良朝以前に出来たもの。恥をすつ——恥をかく——この諺と竹取の本筋の物語と一緒にひつついて来たのだ。そして鉢を捨てる話が出来たのだ。

甲斐なしの語原説明。不死の薬を焼いた故に不士といふ。

竹取は事実を信じてゐない。人間は実在人のみだが歴史でないので、そこにあることを尊敬せずによいので嘘にするが、記紀は信じなくては義理が悪い、とされる。かく古来の諺と物語を結びつける。すると諺から物語を生む。語部の一部の仕事が次第にさうなつてくる。するともう落し咄と同じになる。

阿倍志斐連の家は祖先に弁口の達者な人あり。柳の花を天子に奉る。天子の間に答へ、辛夷の花だと云つた。楊花と間違ひつこないものである。(秦でも趙高が馬と鹿を強弁した宦官があつた話があるが、事実と違ふのを強弁して事実と違ふ事を喜んだのだ) 諸臣が柳だと云つたがとうとう辛夷だと云ひ切つた。これは何か物語があつたの

に、脱けたのである。志斐連はかく、強語をして事実と違ふ事をこじつけて笑はせる物語をしたのだ。そして文学上には僅にしか表れぬが実生活に進んで行はれたのだ。(ノート15終了)

諺より物語を生じ、書物以外で、又は書物で行方知れぬものが出て来るやうに、昔の強ひ語りが室町末になつて、ぼつ／＼出て来た。武家の家々が栄えると武家の日常生活が書物にされてくる。日常茶飯事も書き留められるのだ。常に行はれた落し咄が織豊を経て徳川に入り認められた。これと共に歌物語がある。昔より威力のある歌がある。これを皇王族が聞いて教育さる。平安朝になると手習ひする。

あさか山

難波津に

皆魂に関係ある歌で、手習ひすると手を通して魂が入る。昔は耳よりに入れたのに、だから手習がごく近代まで教育の唯一の手段だったのだ。かゝる歌が世に多くある。この歌を皆が沢山覚えたのだ。紳士としてはかゝる歌を覚えねばならぬ。で、歌を土台とした物語が出来、歌の来歴を書くに至る。歌物語といふ。

竹取、伊勢、大和、皆歌物語である。歌のあつたのに事実をこじつけて来たのだ。我々が見ると歌物語と諺物語の中に入り乱れてゐる。結びついた時代はわからぬが豊臣前後になると表面に出て来る。旅行者が旅で失敗して狂歌を作つてゐるが、最後に出たのが道中膝栗

毛である。

話の終ひに諺、歌のつく形がずつと残つてゐるのであるが、古代よりあり。竹斎物語等も、この形。一休諸国咄、一休狂歌咄、曾呂利狂歌咄等。これで狂歌と諺とついた。昔よりの諺に咄がつくだけでなく自然に話が進む中に言葉のもぢりで話を結ぶ技術が生れるのである。この辺でやめるが、云ひ習はしの歴史がわかり、理由のあるものであつたものであり、又理由づけやうとしたものがあつたことがわかる。

民謡は労働歌より起つてゐる。作業が時代の進みにつれて変形を生む。例へば木を引出し社寺の建築場へ引入れる木遣り歌はもと木挽きの歌であつたもの。それが木遣り歌となつたのだ。それによつて歌の調子も変り囃詞も変り自然に歌の文句も変る。今から見ると前代を思はせる歌詞のものが多いのはこの変化があつた故。石びき歌が城の建築が起るとそれに結びついて来る。するとだんじり（屋台又は船の如きもの）を引く時と同じ類の歌を歌ふ。労働の種類により歌も変るが依然として古いものも残してゐる。一体日本の労働は神の爲事のみであつた。根本は皆神事で説明してゐる。天孫の降られる時も五伴緒が下る。皆神事に仕へてゐる人々。大昔の職をもとへ遡つて考へると五つになると思つた。中臣、Spiritの詞を司るところの斎部、鏡、玉、細女の鎮魂舞踊、皆神事に仕へるもの。それが細かく分かれて後には八十伴緒といふ。伴とは職を統轄してい

ふ言葉。伴部といふものを支配するのが伴の緒。奈良近くになると伴造といつてゐる。天よりは五つの職のみが下つたと信仰的に考へ、それが分化して幾つかわからぬ八十伴緒となつたのである。労働は必ず神事だといふ意識を持つ。労働歌の根本は、労働の結果が労働をしてゐるのは優れた人格神の爲にしてゐる。その人の健康、威力、幸を増すと考へている。大嘗祭の時に天子が大嘗宮に居られる間に悠紀、主基の人々が餅つきをしながら、悠紀、主基の風俗歌を歌つてゐる。ふぞく／＼に／＼を歌ふ。今だに主基の国が定まると悠紀、主基の歌の名所の歌を作つてゐるが、昔はその土に伝はつた由緒の古いものを使つたのに、平安朝頃より新しいものを用ゐるやうになり、更に新作を作るやうになる。歌ひ乍ら力を入れて、餅が出来、共に天子に悠紀、主基の魂が天子に入ると考へる。悠紀、主基は日本を両分して考へ、その代表者の国を定め、その所より神聖な作業をしたのだ。日本国中の威力が天子に入ると信じた。餅つきと一緒に天子の身に力が入ると思ふ。昔の人は本当に信じた。宮殿を建てるときも土地をつき、Spiritを庄へ、又一方で主人の幸にもなるのだ。悠紀、主基でも同様であつた。そして餅がよく出来る事は天子によく魂の入つたしるし。神祭りの一夜酒のよく出来たのは、神がよく祭りを受けたしるしになるのだ。かくして歌をうたつて作業をする。これはその国の一番威力のある魂をその人につける為。はじめその国の最古の歌、後、新作。かくして民謡は神に仕へる労働歌であつ

た。労働の分岐と一緒に歌も分れ、人、神事に与るものが旅をして叙事詩、抒情詩を落として行く。するとそこで萌え出す。又、その土に古い歌もあるといふので歌が栄へるのだ。ところがその土の人はその土に生れた歌だとすべて考へてゐるのだ。

国ぶりとは魂をふる歌。鎮魂の歌といふ事。宮廷のたまふり歌に對して諸国のふりの歌を国ぶり歌と云ふ。——もと天子の直轄地でない地方の歌といふ事——かくて歌とふりと對立して来るのだ。

V

民謡は古い語で小歌といふ。今の声楽の小歌と違ふ。宮廷を大歌、民間は小歌といふ。宮廷の詩はいかなる仕組みか云ふ。宮廷元来のものあるに違ひないがわからぬ。今日あるのは時代的に分れる。記紀の大歌。万葉集の中の大部分が宮廷詩であり、これから更に宮廷詩としやうといふ用意をもつて編纂せられたものが多い。更に大歌の名を称してゐるものがある。万葉集が出来て百年ほどして出来た古今集（万葉集後百年で出来た）に大歌所の歌と東歌とが出てゐる。それから更に進んで平安朝の盛時にまとまつた別の大歌あり。近衛家から出た琴歌譜。これに載つてゐるのも大体大歌。時代的に四種あるわけ。それから古今の大歌、琴歌譜の大歌。つまりだん／＼世の変るにつれ大歌の内容も様式も變つたのだ。結極宮廷に行はれた歌。宮廷にはじめて起つたとか古く持つてゐたとならなくてもよい。

宮廷は日本中の歌の集中する場所。ことばの中に威力ある魂あり。そのエッセンスが歌、諺。諺は命令的、歌は訴へる、哀願する意味を持つ。うたふは歌ふ事と同時に訴へること。うたふがうつたふとなる。四段と下二段の活用。意味と共に活用が變つたが、もと同じ事。自分の衷情を訴へ、尊い人の愛を受ける。雄略は自由な美的性格の方。非常な怒りを発し、側仕への人が殺されやうとしてゐても歌を詠むとすぐ助けてゐる。采女の槻葉の盃の歌。

天子の怒りの魂が鎮まつたと云ひ、舍人が葛城山で狩した時の話。

それは自分の衷情を歌つて相手の理會を求める。訴へるとの関係がわかるね。歌をうたふと歌を受ける人の身に入り、歌の魂が身の中に入るのだ、天子の中に。国々には国ぶりの歌あり。国魂を自由にすれば国を治める。大国御魂、大物主等、国の魂。その魂は歌の中、諺の中に入つてゐる。それを自由にすれば国を治める。これを天子に歌ひかけると天子の身の中に入る。天子のすさむ心を鎮める。信仰も起ころが、もとは歌の魂が天子の心に入つて鎮まる。故に日本中から歌を天子に詠みかけ奉つてゐる。それが皆歌になつてゐる。記紀の歌は皆、うた、ふりになつてゐる。うたの歌ひ方。うたは宮廷に属して古いものといふ事。ふりは宮廷のものになつて歴史が歌より新しいものといふ事にもなる。

〇〇歌とあるのを見てもとは本当は他より入つたもの。元來宮廷に傳つたものは記紀にも僅かしかない。時あるごとに天子忠勤を誓ふ

もの。いくらでも宮廷に集まる。一例東歌。万葉集、古今集にもその他平安の盛時にもあり、特別に風俗といつてゐる。東国は国中で宮廷についた歴史が一番新しい。東人には常に誓ひをせしめられてゐる。東人の歌は注意せられたのだ。宮廷に来る毎にちかふ誓ひが心をひいた。東人は従つて歌がうまくなる。万葉集の歌でも東歌は上手い。ことばが練れないだけで技巧は都の歌より更にうまい。それは宮廷に奉る機会が多い。安倍宗任の歌の如きもこれ。日本の昔の生活では新附のものほど身近く仕へてゐる。古いものほど遠くに置いた。これは今日の逆だが昔はさうした。宮廷の信仰で訓化する為である。我々から云へば考へられぬが昔はさう。宗任も義家のそばにゐた。

我が国の梅の花とは見つれども大宮人はいかがいふらむ

歌は下手だが都人が恥をかいてゐるのだ。東人が、かく歌を作る事を知つてゐたので、こんな話が出来たのだ。貞任の義家との掛け合ひ歌の話。——これも後に出来た咄だらう。館は山の上に城あり。下に屋敷ある作りが館。——その貞任の歌など恋歌のやうでうますぎる。

年を経し糸のもつれの苦しさに

この歌は貞任がその時に作つた歌ではないであらう。伝説が平安朝に出来たのであらうが、東人が歌を作れると信じてゐたのだ。古くは万葉集の時代不明な東歌。淳仁の東歌。平安にもしきりに東歌入

り、しまひには東遊びについた風俗の歌が入つて来てゐる。東人の歌は宮廷、京に沢山入つてゐる。かく国々家々から属する歌を宮廷に機会ごと奉つた。宮廷は歌の集るところ。これが宮廷に残り、それを分類整頓したのが万葉集の中の一部である。万葉集の一、二はそれである。その他にもまだ万葉集にある。

まだその他に宮廷の為に準備したものあり。万葉集中には大伴家持の集めたものが入つてゐる。十七—二十までは大伴家持の編纂したもの。自分の生活の間に書いた歌の日記の如きもの。友人、親類、部下のもの等皆書いたものが宮廷中に入つてゐる。又大伴旅人、編纂した歌集（巻五）憶良、その他、自分のそばの人の歌を含む。巻五は見方では山上憶良の歌のやうに見える。憶良は旅人に気に入つてもらひたくて一心に奉つてゐる。これが直ちに宮廷に入つたかどうか不明だが、宮廷にはかゝる歌の集が家々より奉られてゐる。巻九は藤原家のもの。房前、宇合などが中心となつたもの。旅人・家持の事を見ても宮廷で読む歌を予め作つてゐる。歌を召されると奉る事は天子に誓ふ事になる。それを即興でなく予め作つておいたのだ。宮廷に奉る歌故に念入りに作つてゐるのだ。万葉集の歌はかく見てゆくと大体宮廷詩。その他にも宮廷に収まつた家々、地方の歌で編纂が完了せず二十巻にまゝつて了つたのだ。材料のまゝの姿をもとめたまゝで。沢山の宮廷の材を編纂しかけて止めになつて了つたのである。宮廷を祝福する意味の歌が集つてゐた事になる。

恋歌も挽歌もあるが、これもともかく昔より貴族、国々に伝つてゐる歌は族長の権力、地方の主の持つ力の源。故に作歌の原因の吉凶にか、わらず偉大な力がある故に宮廷に集るのだ。万葉集は天子の寿の永からん事を祝福することはを集めた歌集である。個々の歌にはその意味はなくとも、ともかく天子の万才を予期して祝福する歌が万葉といふ事。万代、万年といふ事。万の齡よろいを持たれる事を祝ふことばが万葉。それを集めたのを万葉集といふ。万葉集になるまでは文学意識が起こらぬ。文学に近づく傾向があるが文学でない。奈良に近づくと貴族が支那文学で養はれた頭で作歌する。支那の直訳でない文学的素養ある人が日本のことばで作歌するので文学的となる。聖武孝謙の時は歌が文学的となる。日本の貴族の歌には宮廷に仕へてゐる、又漢文学の素養のある僧の歌には文学意識が強く、自ら文学として扱つてよいものも多い。直訳しても文学にならぬが、自然に歌に導かれて来る。万葉集だけでなく、奈良前、飛鳥の都の末頃には歌が變つて来る。歌が文学らしくなるのは飛鳥の都の末頃。それまでの歌は文学と云へないもの。飛鳥の末頃天子で云ふと舒明、皇極天皇あたりから歌がはつきりして事実を握つたものになる。万葉集もその頃よりはじまつてゐる。卷一、二の古いのは舒明、皇極天皇の歌。それ以前の歌は歴史的の意味を持たせて載せてゐるのだ。これを除けば舒明、皇極天皇の歌になる。仁徳・雄略の歌は歌の歴史にはなつべからざる関係あり。雄略の歌は——ある時代に呪術的

な意味を持つ。その時代において歌が雄略等の怒りを鎮めるものなり。仁徳の妃は嫉妬心の力の強い方。その怒りを鎮める事を、その頃の歌の仕事、呪術的意義と考へた時代があつたので、万葉集の中に入れたのである。その後は舒明より、どうしても飛鳥の末が日本の歌の多少でも文学的となつた時、歌が表現力が増し、歌らしくなつた時代。万葉集を通り平安朝に入ると、文学的になるものと民間で歌はれてゐるものと二つに分れる。万葉集には文学の歌と非芸術の歌と分れぬが、平安になると何れ文学の歌は三十一字に定り、民謡の方は自由でどんな形にもなつてゐる。万葉集の鑑賞といふ鳥木赤彦の精神である。一方は民謡であるが演芸化し、芸謡としての道を開いて来る。三通りになるのだ。民謡と芸謡とは絡みつき、離れてゐる、又文学としての歌も芸謡から影の影響を受けてゐる。平安より鎌倉に入つて著しい。接触する歌が当時の爛熟した気持ちに触れて芸謡的な要素を鳥羽帝等が取り入れ歌が変る。新古今の特長は芸謡的な要素の入つてゐるといふ事である。

以上（ノート16）